

気分を変えるということ

はるにれの会

宮里 暁美



——近所のJ君(三歳)を預かることになった。ところが戸口のところでJ君が泣き出した。J君は自分をしっかり持って、言い出すと、そう簡単にひかないところがある。どうしよう……。そこで私はひとまず、「ウンチ!」「オシッコ!」と言ってみることにする。——

何故私が「ウンチ!」と叫ぶにいったか。それは、同じ様な場面で上の息子(啓吾)がJ君に対してその様に言い、その内二人で笑い出す、という場面を目撃していたことによる。

おかしいことを言い合って笑っている場面はよくみかけるし、そうやって気持を合わせ合っている姿は十分理解してきたつもりだったけれど、泣いているJ君を泣き止ませようとして、「ウンチ!」と言っている啓吾をみて、私は新鮮な驚きを感じた。

「泣く」を「笑う」に転じるにはどうしたらいいかを、子どもは本能的ともいえる鋭さで理解しているように思えたのだ。

突然おばさんが「ウンチ!」なんて言うものだからJ

君は変な顔をしていた。啓吾と私ではJ君との関係が違うのだから、同じことを言っても土台無理な話だとは思ふ。この時も相変わらず彼は泣き続け、私の方も「そうだよねー」などと妙に納得したりして……そしていつの間にか彼も遊び出したと記憶している。J君と啓吾にとって、その時期「ウンチ！」が気分を変える（通じ合ひ思わず笑ってしまう）魔法の呪文だったのだと思う。

その日から私は、魔法の呪文探しに夢中。誰かさんと私の間の魔法の呪文を、いつ、どうやってみつけていくか……。そう考えると、少しすねたように泣いてみせるあの子どもこの子ども、謎解きのような面白さに満ちてくる。

以下、家庭や、職場（幼稚園）でみつけたいろんな呪文をおしらせしたいと思う。

△家庭にて▽

チキンバーで大笑い

——下の息子（耕太）が五か月ころのこと。団地の郵便受けのところ、近所に住んでいるO君に会う。O君が勢いよくセイントセイヤの歌を歌うと、はじめてと言え程に笑いこぼれる。それからしばらくO君は、耕太に会うたびにセイントセイヤを歌ってくれた。——

——耕太が泣き出してしようがなくなり、「おにいちゃん、なんとかして！」と頼まれた啓吾。耕太のそばに行き、しゃがみこんで顔をくっつけて「こうたん！チキンバー——！」と言う。「これ言うとき笑うんだもんねー」と言う。——

兄弟ができ、又近所づきあいも広がり、赤ちゃんのいる生活も、ずいぶん一人目の時とは違ってきている。啓吾の時にはいなかった人（特に子ども）が周囲にたくさんいる。そして、その人達は、みんなそれぞれの面白さで迫ってくるように思う。そして赤ちゃんである耕太は、面白さに対してかなり敏感に反応しているように思う。

赤ちゃんの笑顔が文句なく可愛いから、人は誰でも

赤ちゃんを笑わせてみたいな、と思う。何かをした時に、偶然にも赤ちゃんが笑ったりすると、O君や啓吾のよう「くすると笑うんだよね」という風に理解し何回でもやってみようとする。そして時には、気分を変えるために言ってみる。

「チキンバー——！」と。

虫がいないかな。

——啓吾が四才のころ。数組の家族で散歩していると、「くくがいないからいやだ」「くくしたいのに」という風にゴネてばかりいた一時期があった。「あー、はやく春がくるといいね、虫がいれば気分が変えられるものね」と言われ、春をじーっと待っていた。——

——耕太はオムツの取り替えをいやがる。朝保育園に連れていく父親にとって、これは大変なできごと。そこでオムツを取り替えたい時には、洗面所の水道を細く出しておくことにする。すると耕太は、その水をいたずらすることに夢中になり、そうこうしている間にオムツを取り替えるという必殺技を、父親は常用している。——

ゴネたり、スネたりしている時は、自分の中が自分の力ではどうしようもないかんにゴチャゴチャになっていく時だと思う。

そんな時は、怒ったり論じたりしてもあまり効果はない。かえていらだちを増してしまいかねない。それよりも、何か気分を変えられるものをみつけることの方が有効だ。

啓吾の場合は虫だったし、耕太の場合は水だった。どちらも自然物であり生命をもっている。何か自分の意志で動いているようなところがあって、思わずひきこまれてしまう感じがする。思わずひきこまれ、ふと気づくと気分が変わっている、というかんじ。

笑ったり、好きな物をみつけたりすることで気分を変えていく我が子をじっくりとみながら、子どもも結構大変なんだな、でもこうやってどうにもならない自分というものときあったり、気分を直しすがすがしくなる、という経験を積み重ねながら、少しずつ少しずつ育って

いくのだな、と思わされた。

△幼稚園にて▽

モルモットをだいて……

——園庭にいとK君が口をとがらせてやってくる。

「もー、U君達僕を入れてくれないんだよ。僕仲間だったのに！」

U君R君の二人は朝から廊下の大きな壁面のところに陣取り、自分達の冒険の地図の続きをかいては貼っていくことに熱中していたのだ。数週間も続いているこの遊びにK君は仲間入りしている時もあつた。それだけに、K君の不満も理解でき、一緒にU君達のところへ行ってみることにした。

「U君達、K君が入れてくれないって、悲しそうに言っているんだけど……」

と話しかけてみる。するとU君達は顔を上げ、

「だってK君たら、変なの、とか言うんだもん。だから入れてあげないんだ。」

という返事。もうおへソが曲り出したK君は、

「変なのって言わないよね」と私が言葉をそえても、プン！と横をむいている。

「それじゃあだめだ。先生と遊ぶしかない。」とK君を連れ、園庭に戻る。K君はプンプンしてる。(どうしようかなー)と私は内心思いながら、何気なく、

「モルちゃんの家をきれいにしてあげよう。」とつぶやき、そうじをはじめ。K君は私にくっついていたので必然的にモルモットに目が行く。

「モルちゃん赤ちゃんだこうかな。」

そう言いながら、かわいい赤ちゃんを抱きあげたK君。心なしか表情がやわらいだようにみえる。しばらくして気づくと、K君がいない。近くにいたHちゃん達に、

「あらっK君どこに行ったんだらう。みてきてくれる？」

と頼むと、部屋の中を見回し廊下の方へ行く。そして戻ってきて、

「K君ね、モルちゃんだいて、U君達のそばで立ってみ

てたよ。」

と教えてくれた。

(四歳児二月)——

自分の思い通りにならないと、人をたたいたりけとばしたりすることもあるK君。意志が強く、不満を持ちだすと不満のかたまりになって爆発してしまふタイプ。四月に入園して以来、一緒に楽しく遊んだり夢中になって虫を追いかけたりしてきたけれど、ひとたびトラブルがおこると、どうしても長く尾をひいてしまい、やつあたりで泣かされる手も少なくない状態だった。

そのK君が、一度拒否されたところへ自分から出向き、じーっと入れてくれるのを待てるようになったのは、大きな成長だと思えた。まだ自分から言い出すには至っていなかったようで、しばらくK君は立ったままであった。私が近づき、

「K君、変なのって言わないならいいんだよって、U君達は言ってるのよ。K君は変なの、なんてもう言わないんじゃないの。」

と話しかけると、コクン、とうなずいた。それならば、

ということでもう一度私と一緒に、U君達のところへ行き、頼むと、今度はすんなり入れてもらった。その時のK君の笑顔。それはすがすがしい笑顔だった。

K君はどうして気分を変えることができたのだろうか。それはモルモットの赤ちゃんを抱いた時に、暖かさや安らぎ、楽しい時の気持がK君の中によみがえったのではないかと思う。そして、暖かくかわいいモルちゃんを抱きながらなら、もう一度U君達のところへ行ってみようかな、という気持になることができたのだろう。

K君はもう、自分の力で気分を変えられるようになってきている。K君をあと押ししているのは、楽しく遊んだ記憶や仲良しの友達なのだと思う。

一度はゴネてみて、しばらくしてから仲間入りする、という行動は、大人からみると、なんて回り道なことを……と思われるけれど、回り道なしに今のK君はありえない。いや、これは回り道ではないのだろう。ひたすらに歩む大切な道なのだろう、と思った。

特別バッチは約束バッチ

——「僕の誕生日がこない！」

そう言つてY君が泣きだした。七月の誕生会で。Y君は三月生まれ。でもしっかりしたところもある男の子。泣き出したY君の音がホールに響きわたる。どうしよう。なんと言つても泣き止まない。とうとうホールのカーテンの中にもぐりこんでしまった。

「だつてずるい。Aちゃん達（七月生まれの子）ばっかりバッチもらつてる！」

と泣きながら言う。バッチというのは私の作ったもので、

「先生からのプレゼントよ」

と渡したものだ。Y君も三月になればもらえるのだけれど、今はまだない。

困っている私をみてS先生が小声で言った。

「何か、代わりのものはないの？」

「えっ!？」

「Y君はバッチが欲しいんでしょ。何か代わりになるものはない？」

そう言われて私は迷った。けれど、とにかく捜してみようと部屋へ走り引き出しの中身をみた。ビー玉、おはじき……あつたあつた！紙粘土で作った玉があつた！それをモールでつないでサクランボのようなバッチができた。ホールに戻るとS先生が私の方をみてきた。

「あつたの？」「気に入らそう？」

気に入るかどうか定かではなかったけれど、意を決してカーテンのうしろにかくれているY君のところへ行く。

「ねえY君、Y君の誕生日もきつと来るよ。その時には、Aちゃん達みたいなバッチをあげるからね。今日は代わりに約束バッチをあげるね。」

するとY君は、ピタリと泣き止んだ。胸にそのバッチをつけ、彼はみんなの所へ戻っていった。他の子ども達は司会の先生の話に引き込まれていてY君の方をふり向きもしなかった。

Y君と私の、それは秘密の「時」だった。誕生会に参加しながら、時々Y君は胸のバッチを触る。何かを確かめるように、彼はバッチを触っていた。

次の誕生会の時、彼はややさめたような落ち着いた声で、八月生まれの友達の胸のバッチをみながら言った。

「いいねえ。たんじょう日がきて。」（四歳児七月）――

「何かかわりものはないの？」

というS先生の一声をきいて、私は一瞬ひるんでいた。

その時、私の頭の中をよぎったのは、

1、Y君だけバッチをもらったら、他の子が「ずるい」というのではないか。

2、Y君を甘やかすことになるのではないか。

という懸念だったのだと思う。そして、それは全くの杞憂に終わった。他の子ども達は何も言わなかったし、Y君もその後少しも甘えん坊に（もともと以上には）なっていない。

私が抱いた懸念をS先生に話すと彼女は笑ってこたえてくれた。

「子どもってそういうものよ。他の子は我慢できているけれど、Y君は今それが我慢できない。誕生会のおもしろさの方にひかれている子ども達は、ずるいって言った

りはしないのよ。夢中な時は気づかない。Y君も頭ではわかっているのよね。でも今はどうしてもバッチが欲しくなっちゃった。わかっているだけに理屈で言ってもダメなのよ。そういう時は、何か代わるものがあれば納得できる。そうやってだんだん大きくなるのよ」S先生の話をききながら、私は何度も何度もうなずき、そして、我が子に接し、地域の子に接し、幼稚園の子に接しながらも、まだまだ子どもを十分に理解していない自分に気づいたりした。

Y君にとって、乗り越えられなくなってしまった「誕生バッチ」を、「約束バッチ」を手に入れることによって乗り越えた時（バッチが胸についたことをきっかけとして自分で気持ちを変えたことにより）彼は自分で自分の胸に、目に見えないもう一つの輝くバッチをつけたのではないか……と思う。

家庭でのこと、幼稚園でのことをふり返りながら、「気分を変える」ということについて考えてきた。

家庭生活においては、子どもがスネたりゴネたりする姿は、ほとんど日常茶飯事である。生活というのは、修羅場であるわけだから。だから、気を取り直すような工夫をあれこれしてみたり、いわゆるなだめたりすかししたりといった行為もほとんど無意識のうちに行っている。

ところがいざ幼稚園という場になると、一つ一つの行為が「教育的にみてどうか」という風に気になります。だから、「パッチがほしいよー」と言って泣くY君に対しても、まず「我慢」という文字がうかんできてしまい、「ほしいのか。よし、よし。」とよりそう気持は出にくくなってしまふ。

私は、そうだった。

けれど、いくつかの印象的な体験を、たまたま担任クラスの対象年令と我が子の年令が同じだったことにより、私の中の妙なこだわりが、少しずつ薄らいできているように思う。

子どもが気分を変える時（気持を取り直す時）、それは、何かを乗り越えた時だともいえる。何かを乗り越え

る姿は美しい。けれど乗り越えることを迫ったり、一つの型として追い込みすぎたりすると、不本意ながら乗り越えてしまったり、挫折してしまいかねない。子どもの心に添い、自らを育てる力を信じ、なにやかやとかかわりつつゆっくり過ぎず時、子どもは自分のペースで、ひそやかに、そしてあざやかに乗り越えていくのではないかと私は思う。

なにやかやとかかわるコツを、我が子にかかわりながら教えてもらうことにしよう……。

あせて原稿を書いている私の向こう側で、息子達が笑いころげている。おもちゃのコインを耳にはめたり鼻にはさんだりする兄をみて、弟が手をたたくて笑っている。僕もやる！とせがんでいる。日常はめちゃくちゃのようで味わい深い。

さ！、書き終わった。私もペンを置きコインを耳にはめて一緒に笑ってこよう。きつと気分が変わるから。